

栗原 彬・澤 幸祐 (2013). 社会的学習によって得られた情報の保持間隔に関する検討：ラットの食物選択場面を用いて。日本心理学会第 77 回大会，札幌コンベンションセンター（北海道医療大学）。

栗原 彬

社会的学習は、試行錯誤学習のような個体が単独で何かを学習する学習形態とは違い、他者を介して何かを学習する学習形態である。このような学習形態はヒトだけに特有のものではなく、チンパンジーの道具使用の観察等をはじめ、ヒト以外の動物種においても広く認められる学習形態である。動物において社会的学習を用いることは、自身の生存を高めることにつながる場合があり、特に食物選択においてその傾向は顕著である。ある食べ物が枯渇した時であっても、食物選択のレパトリーを多く持つことで自身の生存を確保することができるが、試行錯誤によってその食物レパトリーを広げることは、毒物を摂取してしまう危険性を高めることになる。そのような危険を回避するには、他者が食べているものを食べるのが一番安全である。

このような食物選択に関する研究はラットを用いて多く行われてきた。代表的なもので Galef 達の研究がある (e.g., Galef & Wigmore, 1983)。Galef 達はラットをペアで飼育し、①一方のラット（デモンストレーター）を別のケージに移し食物 A を与え、②再びもう一方のラット（オブザーバー）と同じケージに移し、③15分後にオブザーバーを別ケージに移し、食物 A と B を呈示し、どちらの食物に選好が認められるかをテストした。オブザーバーにとって食物 A、B は新奇な刺激であり、どちらも危険な刺激である。しかし、オブザーバーはデモンストレーターが①で食べたものと同じ食物に対して選好を示した。これは、②の場面でオブザーバーとデモンストレーターがインタラクトした結果、デモンストレーターの呼気に含まれる食物の匂いが、オブザーバーが食物選択を選択する時の手掛かりになったことを示している。

その後の研究で、呼気に含まれる食物の匂いが社会的学習による食物選択に重要であることが多く報告されてきたが、そのどれもが社会的学習における情報の保持を検討していない。ラットの食物選択を取り上げて社会的学習の実験をする場合、多くが Galef 達の手続きを参考しているため、情報の保持も③にあるように非常に短い。社会的学習による保持が出来ないとすれば、食物選択によるレパトリーを広げることが出来ず、個体の生存危機を招く結果になるかもしれない。今回の実験では、Galef 達の③の手續の15分を1～2日に延長し、それ以外の手續は変更しないで実験を行った結果、デモンストレーターとインタラクションした時の匂いがする食物に対する選好が消失した。つまり、社会的学習によって得られた情報を保持できなかった。

今回の結果は、食物レパトリーを社会的学習によって広げることは困難であることを示唆す

るが、一方で過剰に社会的学習を利用して食物レパートリーを拡大することは、集団内での食物レパートリーの減少を生じさせかねない。すなわち、集団内で他者が他者のまねをする状況が連鎖することによって、ある行動しか生起しなくなってしまう可能性がある。社会的学習による行動をある程度制限することが、自身だけでなくその集団を維持するためには必要なのかもしれない。社会的学習による食物選択に関わる情報の保持の困難さはこうした制限の一種であることが示唆され、食物選択に関わる社会的学習に関する効果に関して議論を行った。

引用文献

Galef, B. G., Jr., & Wigmore, S. W. (1983). Transfer of information concerning distant foods: A laboratory investigation of the "information-center" hypothesis. *Animal Behavior*, **31**, 748-758.